

幸福の赤いサクランボ



「豪州から紅秀峰初輸入、県が確認」。昨年12月末の報道に、就農当初、夏は山形で冬は豪州でサクランボ作りをしようと夢見ていた自分を思い出した。

私が就農するきっかけは1999年5月、父が大量吐血し、救急搬送され入院したことだった。

当時、私は金山町に住み、妻の父が複数経営するスリッパ製造会社の金山工場長をしていたが、母に請われ、サクランボ繁忙期の7月中ごろまで休暇を取り、農業を手伝うことにした。母と2人でサクランボの収穫や出荷、リンゴや水田の管理をしながら「もう農業

夢見た「外国でも生産」

をやめる潮時だべ」と言おうかと思ひ、実際の収支を聞いてみた。

「多少は利益も出るし、余裕も

ある。何より楽しいから父ちゃんが続けたい」と母は言った。私はその時、農業に発展性がないというのは偏見ではなかったかと疑い、両親の農業に向き合う姿を見ようとしなかった自分を恥じた。

それから1週間考え、入院中の父に家族で山辺に帰り農業がしたいと伝えた。2人の子どもが大人になり、どんな職業に就いても「私の父は農業をしています」と胸を張って言える農業がしたい、と。父に伝えたことは、41歳まで両親の職業に誇りを持ちきれなかった自分への誓いでもあった。

東北芸術工科大学で学ぶ多田さんの長女さやかさんが18歳の時に描いたサクランボの絵。多田農園の商品箱のイラストにも使われている。

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、1・7畝のサクランボ園を経営する。

「もうかる農業」はそのための第一条件だった。耕作放棄や後継者不足、私の持っていた偏見など農業の抱えるあらゆる問題の原因は、労働の正当な対価が得られないことではないか。農家がもうかることこそが、農業が魅力のある職業になることだと考えた。

直販でわずかだが利益を上げていた両親の姿に、付加価値の高いサクランボをもっと栽培すれば売り上げは増やせる。外国でもサクランボを生産すれば、年間を通じて販売ができるはずだ。

そんな「バラ色の夢」を思い描いたが、現実には甘くはなかった。

